故竹内　信先生を憶う

竹内先生が亡くなられてから早くも2年になるが，先生の面影は私の記憶の中に，今もはっきり生きている。先生のお名前は古くから存じ上げていたが，時々何かの会合でお姿を拝見する丈けで，個人的に言葉を交わす機会はなかった。大阪女学院が短期大学を開設して，先生を招へいすることを決定した時，即ち昭和42年の終り頃から種々の打合せのためにお宅へ伺ったりもして度々お目にかかるようになった。先生はどちらかと言えば蒲柳の質であり，讃美歌の専門家であったがその声はしわがれていた。この先生があれ程の幅広く多方面の活動をなさっているのかと疑った位であった。

最初，テキストの打合せをした時，自分は米文学の中から作品を選ぶから，私には英文学の中から選ぶことにきめておこうとのことであった。爾来私は，先生のお話を聞き，なさることを見て，大学の先生の在り方を学んだものである。先生はまことに広い学識を持っておられたので，英文講読以外の演習の講義題目には「アメリカ研究」，「英米研究」があり，「英語聖書」も勿論その一つであった。

先生は牧師であったから，教室内の講義は別としても学内全般での学生指導には多分に牧会的な配慮が滲み出ていて，キリスト教主義学校の先生はかくあるべしとのヒナ型を見せて頂いたように思ったことを憶えている。又，先生は歌人（アララギ派）であったから，語感が鋭く，こまかい言葉の表現，文章の書き方に大変きびしく，一字もおろそかにしない細かい注意が払われていた。奥様から頂いた説教集「過ぎ行かぬ言葉」，詩集「はまゆう」を一読して，先生ならではと思われる言葉づかい，と同時に籠められた思想は，生前の先生の時々なさっていた咳払いや息づかいまで感じられる位，私の心に迫るものがある。

人間は誰でも自分に最も適当な仕事が与えられて，それに全精力を集中し，

その職場で生を終えることが最大の幸福であると思う。先生は教育者としては大阪女学院短期大学，牧師としては香里ケ丘教会，讃美歌学者としては日英米の讃美歌学会々員，又社会事業家としては教会附属保育園と，実に幅広く，場所と働きを十分に生かして生を終えられたのである。その間，並み大抵ではない多くの艱難と苦労をなめられたことであろうと思われるが，又それがなかったらもっと長命を保たれていたかも知れないが，ご苦労が多ければそれ丈け多く磨きがかけられ，人間的にも深くなられて，美しい最後の花を咲かすことが出来て，先生はほんとうに生き甲斐のある人生はこれだよと良い模範を私たちに残して逝かれたのである。私は先生に深甚の感謝を捧げ度いと思う。

終りに，奥様とお嬢さまの御平安を心からお祈りしてこの稿を措く。

白　水　喜　造